

巻 頭 言

2022年度の事業報告書の発刊に際しまして、一言ご挨拶を述べさせていただきます。

この2年間のサステナビリティ研究所の活動は、新型コロナウイルス対策の影響を全面的に受けた事によって、本来目指した広範な取り組みが極めて限定的になってしまったと言わざるを得ませんでした。本研究所は一昨年、SDGs関連の諸事業の推進を目指して組織改編を実施し、新たな取り組みを開始いたしました。SDGsの掲げる目標成果は幅広い取り組みを必要とするところではありますが、コロナ対策によって我々の行動範囲が限定的になり、望んだ成果を得る事が出来ずに来た感が否めません。それでも、2年に及ぶ長期の対策期間があったため、Webやオンデマンドコンテンツを用いた遠隔手法を最大限に活用するかつてない取り組みが展開できたのも「瓢箪から駒」の例えになぞらえる成果のひとつと言えます。大学に目をやれば、遠隔授業、対面授業を織り交ぜながらそれぞれの特徴的な利点を活かす試みが教員・学生ともなされるようになりました。ウイルスも更に変異により感染力の強い種に置き換わりつつあります。当分対策を継続せねばならない中で、本学のみならず日本社会はウィズコロナを目指す方向を模索し始めた感がします。

世界に目を向けると、コロナに加え、SDGsの目的とは真逆の方向である戦争、侵略がロシア－ウクライナ間で発生し、人的被害もさることながら経済にもその影響が表れ、国際社会は急激に極めて不安定になってきていると感じます。われわれ自然あるいは人文科学研究者にとっても研究開発活動同様、未来に向けて人類の持っている英知を様々な分野で働かせねばならない必要性を強く感じます。

そんな昨今ではありますが、本報告書に示すSDGs関係の諸活動が、本学内及び鳥取県、鳥取市、鳥取商工会議所等、本学を取り巻く社会環境の中にも新たに展開、継続され、サステナビリティ研究所を中心に本学関係者が深くかかわって推進することができました。この報告書の成果が、将来社会をより良くする人類の英知の一端になることを期待するものです。

コロナ禍および東欧の戦争災禍の一日も早い終息を願うとともに、今後のサステナビリティ研究所の新たな活動展開を期して、巻頭言に代えさせていただきます。

2022年6月吉日

サステナビリティ研究所長

田島 正喜